



キャラクターの笑いの表現に関する日露対照 : ドストエフスキー『罪と罰』の用例と日本語訳から

宿利, 由希子

(Citation)

国際文化学, 30:40-64

(Issue Date)

2017-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009738>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009738>



キャラクタの笑いの表現に関する日露対照

—ドストエフスキー『罪と罰』の用例と日本語訳から—

Japanese — Russian Contrastive Research of Laughter by “Character” Through Examples in “Crime and Punishment”

宿利由希子

SHUKURI Yukiko

Summary

This article examines representations of laughter voice and how to laugh, which appear in “Crime and Punishment”, written by a famous Russian writer, Dostoyevsky. In this paper, Russian representations and Japanese versions by three translators are compared. In the result, following things revealed. (1) The representations of laughter voice “Ха-ха-ха! (Ha-ha-ha!)” and “Хе-хе-хе! (He-he-he!)” are translated differently according to the characters who laughed or the translators. Furthermore, the relation between characters and Japanese representations of laughter voice is richer in variety than Russian. For instance, all three translators translated one female character's “Ха-ха-ха!” as “Ha-ha-ha!”, however, two of them translated the another female character's “Ха-ха-ха!” as “Ho-ho-ho!”. (2) The representations of how to laugh, “захохотать (zahohotat, to start to laugh loudly)”, “хихикать (hihikat, to giggle)”, “улыбаться (ulybatsya, to smile)”, and “с улыбкой (s ulybkoy, with a smile)” are also translated differently according to the characters who laughed or the translators. (3) These differences in translation are characterized by Japanese Onomatopoeia, which gives the characters different personalities. (4) The translators translated nearly the same without Onomatopoeia, when the original Russian version has fine depictions. (5) The relation between characters and Japanese representations of how to laugh is richer in variety than Russian at least in these four expressions, when the original Russian version does not have fine depictions.

キーワード

発話キャラクタ、表現キャラクタ、思考キャラクタ、笑い声、笑い方

I はじめに

私たちは、ある人物が笑うのを見たり聞いたりしたとき、その笑いの主の意図とは関係のない描写をすることがある。下の悩み相談サイトへの書き込みを見られたい。

(1) Yahoo! 知恵袋 monjunochie3nin さん 2008/06/30 投稿

ニコニコとニヤニヤの違いを教えてください。

最近ニヤニヤと言われることが多く困っています。(昔はよくニコニコしてるねと言われました)

[http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1117478006, 最終確認 : 2016/11/10]

(1)は、笑いの主の意図(例えば深い意味はなくただ微笑むなど)とは関係なく、笑いが否定的に描写されたという笑いの主の嘆きである。「にやにや」は「意味ありげにうす笑いを浮かべる(小野 2007)」様子を表すとされているが、(1)の笑いの主にそのような意図はない。これは、あるときは「にこにこ」あるときは「にやにや」と意図的に使い分ける「スタイル」の問題ではなく、笑いの主の「キャラクタ」が関係していると考えられる。

定延(2006, 2011, 2014, 2016)は、「スタイル」と「人格」の間に存在する、状況ごとに変わり得る人物像を「キャラクタ(キャラ)」と呼び、キャラクタが日本語社会に多大な影響を与えていることを指摘している。定延の一連の研究によると、キャラクタは、手振りや姿勢、言葉など、様々なものと結びついており、その内言葉とキャラクタとの結びつき方には少なくとも四つの種類がある(定延 2011, 2016)。一つ目は、ある成人男性について「あの人は《坊っちゃん》だ」¹⁾「あいつは《子供》だ」と言って、その成人男性が自己中心的あるいは幼児的なキャラクタであることを示す場合である。《坊っちゃん》《子供》のような言葉は「キャラクタのラベル」、それらで表されるものは「ラベルづけられたキャラクタ」と呼ばれる(定延 2011: 112)。二つ目は、言葉遣いが、その話者のキャラクタを示す場合である。例えば、「そうじゃ、わしが知っておる」は《老博士》、「ほほほ」と笑うのは《お嬢様》というように、言葉遣いから話者の人物像を頭に思い描くことがあるが、このような言葉遣いは「役割語(金水 2003)」²⁾、話者の人物像は「発話キャラクタ(定延 2006, 2011)」と呼ばれる。三つ目の結びつきは、「たたずむ」のは《大人》キャラ、「にたりとほくそ笑む」のは《悪者》キャラというように、動作を表現する言葉が、その動作を行うキャラクタをも示すものである。「にたりとほくそ笑む」のような言葉は「キャラクタ動作の表現」、キャラクタ動作の表現によって示される《大人》キャラのようなキャラクタは「表現キャラクタ」と呼ばれる(定延 2011: 118)。四つ目の結びつきは、「あの若者を何とか助けられないか—貴婦人は懸命に考えた。(下線は筆者による)」というように、内言の言葉が、思考だけでなく思考の行い手のキャラクタをも暗に示すものである(定延 2016: 26)。下線部のような言葉は「内言」、思考を発話するように心内で行う様子が表現されるキャラクタは「思考キャラクタ」と呼ばれる(定延 2016: 26)。

このうち二つ目の結びつき、つまり「役割語-発話キャラクタ」に関する研究は、日本語

と他言語との対照研究が盛んに行われている。これらの先行研究により、日本語は他言語よりも役割語が豊富であり、日本語から他言語に翻訳する際、表現しきれない発話キャラクターの特徴があることが指摘されている(鄭 2005; 山口 2007; 福嶋 2012)³⁾。さらに、日本語非母語話者の発話が、話者の意図とは関係なく、翻訳者によって特定の役割語に翻訳される場合があることも報告されている(太田 2009; 中村 2013)。

では、笑い声の役割語と発話キャラクターの関係はどうであろうか(疑問点 1)。また、言葉とキャラクターの結びつきが強く、種類が豊富なのは「役割語-発話キャラクター」の関係においてのみであろうか(疑問点 2)。「笑い」は、ドストエフスキーが小説『死の家の記録』で登場人物の口を借りて「笑い方からその人となりがわかる」と述べているように、動作主のキャラクターを連想させる動作である。だが、疑問点 1 に関して、これまでの役割語研究では「ほほほ(おほほ)」が「女ことば」であり、特に《お嬢様》《奥様》の笑い声であるという指摘(たとえば金水 2014)以外、笑い声の表現について触れられてきていない。疑問点 2 に関して、特に笑い方と笑いの主、つまり「キャラクター動作の表現-表現キャラクター」の結びつきを示す上述の(1)のような現象は、実際のコミュニケーション場面ではよく観察されるが、その研究は定延(2011, 2013)、羅(2011)以外ほとんど行われていない。

そこで本研究は、疑問点 1 および 2 を明らかにするため、「役割語-発話キャラクター」だけでなく、「キャラクター動作の表現-表現キャラクター」や「内言-思考キャラクター」にも注目し、日本語における言葉とキャラクターの関係の特徴を明らかにすることを目指す。そのため、ロシア文学とその日本語翻訳を対象に、日本語とロシア語の笑いに関する表現を、比較、考察する。疑問点 2 に関して、本稿では種類の豊富さについて述べ、結びつきの強さについては、今後コーパスを用いた実態調査や、日本語・ロシア語の母語話者を対象とした表現とキャラクターのマッチングによる意識調査などを行う予定である。

II 先行研究

2.1 日本語の笑いの表現とキャラクターに関する研究

日本語は笑いに関する語彙が豊富であり、それらは笑いの原因、相手に対する感情、声の調子、笑う態度や振る舞い、笑い方の品位などの違いを表す(森田 2006: 85-86)。本節では、豊富な笑いに関する語彙の中でも、特にオノマトペに注目した研究を紹介する。

中里(2007)は、「あはは」「ほほほ」のような、笑い声を忠実に描写するものを「〈模写に近い〉笑い声を表すオノマトペ」、「げらげら」「くすくす」のように笑い声を類似の音で表現するものを「〈象徴度の高い〉笑い声を表すオノマトペ」、「にっこり」「にやにや」のような、笑いの表情や笑い方を描写するものを「表情・笑い方を表すオノマトペ」と呼んでいる。本稿では、登場人物のセリフや内言に現れる「〈模写に近い〉笑い声のオノマトペ／表現」を「笑い声のオノマトペ／表現」、地の文に現れる「〈象徴度の高い〉笑い声のオノマトペ／表現」および「表情・笑い方のオノマトペ／表現」を「笑い方のオノマトペ／表現」として、笑いの表現を二つに分けて見ていく。

笑い声のオノマトペについて、「ははは」は「屈託なく快活」な、「ひひ」は「気味のわるい、または下品」な、「おほほ」「ほほほ」は「上品」な笑い声、「へへへ」は「人をばか

にしてせせら笑う」または「照れたり、人にへつらったりして笑う」声を表すとされる(小野 2007)。羅(2011: 46)によると、「ほほほ」は日本語社会では《上品な女》の笑い声のオノマトペとされているが、中国語には《上品な女》専用の笑い声の言葉が存在しないため、中国語に翻訳する際、「ほほほ」に付随する発話キャラクターの特徴は表現されにくい。

笑い方のオノマトペについて、「くすくす」は「他人に聞こえないように」「ひそかに笑う」声やその様子、「からから」は「高く笑う」または「屈託なく笑う」声や様子、「げらげら」は「大声で笑う」または「遠慮なしにばかにし」て笑う声や様子、「へらへら」は「不真面目な態度で、理由もなく笑う」様子を表すとされている(小野 2007)。また、「にこにこ」は「うれしそうに笑みを浮かべ続ける」様子、「にこり」は「うれしそうに一度ほほえむ」様子、「にっこり」は「明るい表情で笑う」様子、「にやにや」は「意味ありげにうす笑いを浮かべる」様子、「にやり」は「意味ありげな笑いを顔に浮かべる」様子を表す(小野 2007)。羅(2011)は、日本語社会において「からから」は《男性》的な笑い方として現れること、「にこにこ」「にこりにこり」「にこっ」などの「にこにこ」類は《上品な善玉》キャラ、「にやにや」「にやりにやり」「にやり」などの「にやにや」類は《下品な善玉》または《悪玉》キャラ、「にたにた」「にたりにたり」「にたり」などの「にたにた」類は《悪玉》キャラの笑い方の表現として現れることを報告している。

日本語の笑いのオノマトペの変遷をまとめた中里(2007)は、現代語で使われる主なオノマトペが近世までに数多く生み出され、すでに使用されていたことを報告している。また中里(2007: 12)によると、近代(特に明治期)は、二葉亭四迷などの作家たちが細密な描写を目指して笑いの表情や笑い方、笑いの内容を詳しく説明することに力を注いだため、近世に比べ新たなオノマトペが生まれにくい状況にあったという。

以上のように、先行研究において、日本語には笑いに関する語彙、特にオノマトペが豊富で、中には発話キャラクターや表現キャラクターと強く結びついているものがあり、他言語では日本語の発話キャラクターの特徴を表しきれないこともあることが報告されている。しかし、キャラクターとの結びつきが指摘されているオノマトペは、「おほほ・ほほほ」、「からから」、「にこにこ」類、「にたにた」類など、限られたものであり⁴⁾、その他の笑いの表現とキャラクターとの関係についてはほとんど明らかにされていない。また、近世までは数多く生み出されていた日本語の笑いのオノマトペは、近代に入ると生み出されにくくなったが、その原因の一つとして、明治期の作家たちによる「細密な描写」が指摘されている。この作家たちの代表として挙げられている二葉亭四迷は、ロシア文学の翻訳者としても有名であり、原文に忠実な翻訳を目指した人物である(靄島 2012)。このことから、ロシア文学の翻訳が明治期の作家たちによる「細密な描写」傾向に少なからず影響を与えた可能性が考えられる。そこで本研究では、日本語とロシア語における「笑い声の表現-発話キャラクターおよび思考キャラクター」の関係と「笑い方の表現-表現キャラクター」の関係を見る。中里(2007)の指摘を踏まえ、「笑い方の表現-表現キャラクター」の関係において、細密な描写がある場合、どのような和訳が当てられるのかについても観察する。

2.2 ロシア語の笑いの表現とキャラクターに関する研究

ロシアの言語学の世界では、キャラクターや役割語という概念が広まっておらず、「ロシア

語役割語研究」と名のつく研究は行われていないが、役割語の存在をうかがわせる研究はいくつか存在している(宿利他 2015; 宿利他 2016)。例えば、ロシア文学に関する研究には小説の登場人物の話し方を分析するものが多く、特に文学翻訳の領域では、ロシア語原文で表現できた登場人物のイメージを、他言語でどのように表現するかという点が議論されている(宿利他 2015)。

ロシア語の笑いに関する表現について、どのような笑い声がいくつ存在するのか、どのような人物がどのような笑い声で笑うのかといった、笑い声の表現に関する研究は管見の限り見当たらない。一方、ロシア語の笑い方の表現に関する研究としては、ロシア語の感情に関する表現をまとめ露英比較を行った Wierzbicka (1998) が挙げられる。Wierzbicka (1998) によると、ロシア語の“хихотать (hohotat, 大笑いする)”や“заливаться смехом (zalivatsya smehom, 大声で笑う)”という言葉で表現される抑制のない態度は、ロシア語社会において健康的かつ肯定的な印象を持たれるのに対し、英語社会では下等で動物的な印象を与えるという。また、Wierzbicka (1998) はロシア語の動詞“хихикать (hihikat, くすくす笑いする、忍び笑いする)”は無意識的に感情の抑制なく笑うことであり、同じく無意識的で感情の抑制のない英語の“giggle (くすくす笑う)”に相当するが、英語の意識的で感情を抑えた“chuckle (くすくす笑う、ほくそ笑む、含み笑いをする)”とは異なることを報告している。

“хихотать”や“заливаться смехом”などの大声で笑う行為がロシア語社会では肯定的に受け取られ、“хихикать”が無意識的で感情の抑制のない笑い方であるという Wierzbicka (1998) の指摘は、これらの動詞と表現キャラクターの関係を考える上で重要であろう。しかし、ロシア語の笑い声や笑い方の表現に関して、「役割語・内言-発話キャラクター思考キャラクター」、「キャラクター動作の表現-表現キャラクター」の関係性を示すような研究は見当たらない状況であると言える。

III 研究の枠組み

本稿では、ロシアの作家ドストエフスキーの長編小説『罪と罰』の、ロシア語原文⁵⁾とその和訳に出てくる笑いの表現を比較する。この作品には多様な登場人物が描かれており、ロシア語原文、その和訳双方において、様々な笑いの表現が数多く用いられているため、笑いの表現とキャラクターの調査に適していると考えた。また、ドストエフスキーは日本でもよく知られた作家であり、その代表作の一つである『罪と罰』は何度も異なる翻訳者によって翻訳されている。そのため、笑いの表現の和訳に翻訳者による違いが見られるのではないかと考えた。定延 (2013) は、現代語の感覚では《悪者》キャラの印象を持つ「にやにや」「にやり」などの言葉について、昔はそのような意味や印象はなく、ヒロインや《正義漢》キャラの描写にも使われていたと述べ、少しずつ意味変化してきた可能性を指摘している。本稿もそのような可能性を考え、40年以上前に出版された翻訳版と比較的近年に出版されたものを用いることとした。本研究で比較した『罪と罰』の翻訳版の翻訳者、出版年、書籍名、出版社を表1に示す。また、本稿で扱うロシア語の笑いの表現について、露和辞典および露露辞典⁶⁾に掲載されているロシア語の笑い声の表現を表2に、笑い方の表

現を表3にまとめる。

表1 本研究で比較した『罪と罰』の翻訳版の翻訳者、出版年、書籍名、出版社

翻訳者	出版年	書籍名	出版社
米川正夫	1969	『ドストエフスキー全集 6 罪と罰』	河出書房新社
小沼文彦	1976	『ドストエフスキー全集 6』	筑摩書房
亀山郁夫	2008-2009	『罪と罰』 <1>, <2>, <3>	光文社

表2 ロシア語の笑い声の表現

ロシア語	ローマ字表記	声の大きさ	露和・露露辞典
хо-хо (-хо)	ho-ho (-ho)	大きな声	ほほ (大笑)
ха-ха (-ха)	ha-ha (-ha)	大きな声	ははは (哄笑)
хе-хе (-хе)	he-he (-he)	小さな声	へへ (忍び笑い、独り言)
хи-хи (-хи)	hi-hi (-hi)	小さな声	ひひ (くすくす笑い)

表3 ロシア語の笑い方の表現

ロシア語	ローマ字表記	声の有無	露和・露露辞典
залиться смехом	zalitsya smehom	声有り	大声で笑う
загоготать	zagogotat	声有り	大笑いし出す
разразиться смехом	razrazitsya smehom	声有り	どっと笑い出す、 激しく笑いが生じる
покатиться со смеху	pokatitsya so smehu	声有り	笑い転げる
хохотать	hohotat	声有り	大笑いする
захохотать	zahohotat	声有り	大笑いし始める
расхохотаться	rashohotatsya	声有り	どっと笑い出す、 大声で笑い出す
смеяться	smeyatsya	声有り	笑う、笑いかける、 嘲笑する
насмехаться	nasmeyatsya	声有り	大いに笑う、嘲笑する
засмеяться	zasmeyatsya	声有り	笑い始める
засмеять	zasmeyat	声有り	嘲笑する
усмехнуться	usmehnutsya	声有り	軽く嘲笑する、薄笑いする
хихикать	hihikat	声有り	くすくす笑いする、 忍び笑いする
захихикать	zahihikat	声有り	ひひと笑い出す
улыбаться	ulybatsya	声無し	微笑する、笑いかける
с улыбкой	s ulybkoy	声無し	にっこりして
ухмыльнуться	uhmylnutsya	声無し	にやにや笑う、ほくそ笑む、 得意げに笑う
скалить зубы	skalit zuby	声無し	歯をむき出す (笑う)
осклабляться	osklablyatsya	声無し	歯を見せて笑う

笑い声の表現は、露和・露露辞典の説明から声の大きさは判断できるが、性別や品格といった動作主の属性は判断できない。『罪と罰』のロシア語原文には“ха-ха (-ха)”と“хе-хе (-хе)”のみ使用されているため、本稿ではこの二つの笑い声の表現を観察する。表2に示したもの以外にも、近年インターネット上では“аха-ха (aha-ha)”“охо-хо (oho-ho)”“пол

(lol)” “о-ля-ля (o-lya-lya)” などが使用されているが、本稿では扱わない。

笑い声に比べ、笑い方の表現は種類が豊富である。露和・露露辞典の記載から、声を出すか出さないか、大いに笑うか控えめに笑うか、相手に対する嘲りの気持ちがあるかなどの点は判断ができるが、性別や品格といった動作主の属性は判断できない。本稿では、『罪と罰』において、複数の登場人物の笑い方として使われている “захохотать (zahohotat)” “хихикать (hihikat)” (および “хихикать” し始める) という意味の “захихикать (zahihikat)” “улыбаться (ulybatsya)” “с улыбкой (s ulybkoy)” のみを観察する。

IV ロシアの笑いの表現とキャラクターに関するロシア語母語話者の意識

前章に示したロシア語の考察対象について、笑いの主に関する研究は見当たらない。そのため、観察に先立ち、予備調査としてロシア語母語話者数名を対象に笑いの主に関するインタビュー調査を行った。調査は2016年11月～2017年1月に、ロシアのノボシビルスクに住む20代女性2名、30代女性1名、20代男性1名の計4名のロシア語母語話者を対象者に行った⁷⁾。調査では、前章の表2、表3に示したロシア語の笑い声の表現と笑い方の表現を呈示し、「どのような人物が笑う笑い声／方だと思うか」を問い、自由に回答してもらった。なお、笑い声の表現に関しては、20代女性1名と20代男性1名の計2名のみに回答してもらった。

調査の結果、ロシア語母語話者は“(за)хихикать”に《女の子》《若い女性》というイメージを、“улыбаться”、“с улыбкой”には1名が《善人》のイメージを持っているが、その他の笑い声、笑い方の表現の主体については特定のイメージを持っていないことがわかった(表4、5参照)。また、「どのような人も場合によってこのような笑い声／方で笑うことがある」というコメントを2名から得た。

表4 ロシア語の笑い声の表現と笑いの主体に関する調査結果

ロシア語	露和・露露辞典	笑いの主 (回答者数)
ха-ха (-ха) (ha-ha (-ha))	ははは (哄笑)	特定の主体なし (2名)
хе-хе (-хе) (he-he (-he))	へへ (忍び笑い、独り言)	特定の主体なし (2名)

表5 ロシア語の笑い方の表現と笑いの主体に関する調査結果

ロシア語	露和・露露辞典	笑いの主 (回答者数)
хохотать (hohotat)	大笑いする	特定の主体なし (4名)
захохотать (zahohotat)	大笑いし始める	特定の主体なし (4名)
хихикать (hihikat)	くすくす笑いする、忍び笑いする	恥ずかしがり屋の女の子 (1名) 若い女性 (3名)
захихикать (zahihikat)	ひひと笑い出す	恥ずかしがり屋の女の子 (1名) 若い女性 (3名)
улыбаться (ulybatsya)	微笑する、笑いかける	特定の主体なし (3名) 善人 (1名)
с улыбкой (s ulybkoy)	にっこりして	特定の主体なし (3名) 善人 (1名)

この調査はあくまで次章以降の観察の参考のためのものであり、対象者の数も少ないため、これをロシア語母語話者全体の認識とすることはできない。今後調査対象者を増やし、アンケートによる意識調査を行う予定であるが、本稿では次章以降、この結果を参考に観察を行う。

V 『罪と罰』に現れる笑いの表現の観察

5.1 『罪と罰』に現れる「笑い声の表現-発話キャラクターおよび思考キャラクター」の関係

ここでは、笑い声の表現と発話キャラクターおよび思考キャラクターの関係について、『罪と罰』に現れた“Xa-xa-xa! (Ha-ha-ha!)”および“Xe-xe-xe! (He-he-he!)”を、実例を挙げながら見ていく。読者の理解のたすけとなるよう、あらかじめ結論を述べておけば、“Xa-xa-xa!”はロシア語では男性、女性のセリフ、男性の内言⁸⁾に現れる一方、日本語においては男性の場合原文の音に対応して和訳され、女性の場合登場人物によって和訳に差が生じることがある。また、2人の女性に当てられた異なる和訳から思い浮かべられる発話キャラクターが異なる可能性がある。さらに、“Xe-xe-xe!”はロシア語原文には様々な男性の登場人物の笑い声の表現としてセリフおよび内言に現れるが、その和訳になると翻訳者や登場人物によって違いが生じること、当てられる和訳によって思い浮かべられる発話・思考キャラクターが異なる可能性があることがわかった。

5.1.1 “Xa-xa-xa! (Ha-ha-ha!)”

“Xa-xa-xa!”は、ロシア語原文に男性と女性の笑い声として現れる。男性の場合原文の音に対応した訳がなされる一方、女性の場合和訳に差が出る。

(2)は、予審判事ポルフィーリー(30代男性)の、主人公ラスコーリニコフに対する発話のロシア語原文、(3)~(5)はその和訳である。“Xa-xa-xa!”は3名の翻訳者に「は、は、は!」と訳されている。以下、下線はすべて筆者による。

- (2) А вы думали нет? Подождите, я и вас проведу, xa-xa-xa! (A vy dumali net? Podozhdite, ya i vas provedu, ha-ha-ha!) [Достоевский, p. 311]

- (3) あなたはそうじゃないと思ってたんですか? 待ってらっしゃい、いまにあなたも一杯くわしてあげますから-は、は、は! [米川訳, p. 250]

- (4) そうじゃないとお考えだったんですか? まあ待ってらっしゃい、いまにあなたのこともかついであげますから-は、は、は! [小沼訳, p. 235]

- (5) ちがうと思っておられた? それじゃあ、あなたもひとつ、かついであげましょう、は、は、は! [亀山訳<2>, p. 157]

(6)は、主人公ラスコーリニコフ(20代男性)が予審判事ポルフィーリーとの会話の合間

に、以前の自分の発言に対して一人心の中で笑う内言のロシア語原文、(7)～(9)はその和訳である。ポルフィーリー同様、ラスコーリニコフの“Ха-ха-ха!”も「は、は、は！」と訳され、男性の“Ха-ха-ха!”はセリフの場合も内言の場合も辞書通り和訳されると言える。

- (6) А это я ловко про квартиру ввернул: потом пригодится!... В бреду, дескать!... Ха-ха-ха! (А eto ya lovko pro kvartiru vverhul: potom prigoditsya! V bredu, deskat! Ha-ha-ha!) [Достоевский, p. 467]
- (7) とにかく貸間のことをひと口はさんどいたのはうまかった。あとで役に立つ。夢うつつだったっていうわけだからな！……は、は、は！ [米川訳, p. 247]
- (8) しかし部屋のことを言っておいたのはおれとしても上出来だったぞ、あとで役に立つだろうよ。熱に浮かされていたので、というわけだ！……。は、は、は！ [小沼訳, p. 232]
- (9) 部屋のことを持ちだしたのはよかった、あとで使えそうだ！幻覚状態、ね！……は、は、は！ [亀山訳<2>, p. 151]

一方女性の場合、登場人物によって和訳に差が生じる。(10)は、カテリーナ（中年女性）が、夫マルメラードフの葬儀の後の食事会で、アパートの家主であるドイツ人女性に発したセリフのロシア語原文、(11)～(13)はその和訳である。カテリーナの“Ха-ха-ха!”も原文の音に対応させた辞書通りの和訳がなされている。

- (10) если на случай покрадут ваши ложки, то я вам за них не отвечаю, предупреждаю заранее! Ха-ха-ха! (esli na sluchay pokradut vashi lozhki, to ya vam za nih ne otvechayu, preduprezhdayu zaranee! Ha-ha-ha!) [Достоевский, p. 467]
- (11) もし、ひょっとしてあなたのさじが盗まれても、わたしは責任を持ちませんからね、まえもってお断りしておきますよ！は、は、は！ [米川訳, p. 376]
- (12) もしもひょっとしてあなたのスプーンが盗まれるようなことがあっても、わたしは責任を負いませんからね、前もってお断りしておきますよ！は、は、は！ [小沼訳, p. 356]
- (13) 万一、おたくのスプーンが盗まれても、わたし、責任はいつさいとりませんから、はじめに言っときますけど！は、は、は！ [亀山訳<3>, p. 62]

(14)は、ラスコーリニコフの母プリヘーリヤ（中年女性）の、息子であるラスコーリニコ

フに対する発話のロシア語原文である。プリヘーリヤは前述のカテリーナと同じ中年女性であるが、“Ха-ха-ха! (Ha-ha-ha!)” の和訳(15)～(17)には差が見られる。

(14) И смели они про тебя думать, что ты помешался. Ха-ха-ха! (I smeli oni pro tebya dumat, chto ty pomeshalsya. Ha-ha-ha!) [Достоевский, pp. 627-628]

(15) それだのにあの人たちは、お前の気が違ったなんて、よくも考えられたものだね。
ほ、ほ、ほ！ [米川訳, p. 509]

(16) それなのにお前が気が狂ってるだなんて、よくもまあそんなことが考えられたものだよ。ほ、ほ、ほ！ [小沼訳, p. 484]

(17)なのに、あの人たちったら、よくもあんなことが言えたもんさ、おまえの気がくるったなんてさ。は、は、は！ [亀山訳, <3>, p. 379]

(17)は原文の音に対応させ、「は、は、は！」と訳しているが、(15)(16)は「ほ、ほ、ほ！」と訳している。金水(2003: 67)は「ある話体(文体)が、特徴的な性質の話し手を想定させる度合い」を「役割語度」と呼んでおり、《上品な女性》キャラの笑い声であるとされている「ほほほ」は役割語度が高い笑い声の表現である。一方「ははは」は、先行研究において「屈託なく快活」な笑い声であるということ以外、特に動作主を特定するような指摘はされていない。あえて原文の音に対応しない「ほほほ」という笑い声を当てるほど、「ははは」という笑い声はプリヘーリヤにふさわしくないと2名の翻訳者が判断したということである。「ははは」は、「ほほほ」に比べ役割語度は低い、少なからず何らかの発話キャラクタを連想させる(少なくとも「このような人物の笑い声ではない」という消去法的な連想をさせる)と考えられる。

以上のとおり、“Ха-ха-ха!”は、ロシア語では男性、女性どちらにも使われる一方、日本語においては男性の場合原文の音に対応した訳がなされ、女性の場合登場人物によって和訳に差が生じることがあることがわかった。

5.1.2 “Xe-xe-xe! (He-he-he!)”

“Xe-xe-xe!”は、ロシア語原文に男性の笑い声として現れる。原文では、前述の主人公ラスコーリニコフ、予備判事ポルフィーリー、そして退職官吏マルメラードフ、弁護士ルージン、警察署長ニコジーム・フォミッチの5人が“Xe-xe-xe!”と笑っている。小沼が一貫して「へ、へ、へ(!)」と訳す一方、亀山は一貫して「へ、へ、へ！」という和訳を当てていない。また、米川も警察署長には異なる和訳を当てている。

(18)は、マルメラードフ(中年男性)の、主人公ラスコーリニコフに対する発話のロシア語原文、(19)～(21)はその和訳である。マルメラードフは、一家を養うため売春をする娘ソーニャに飲み代をもらいに行ったことを、酒場で自嘲気味に話している。

- (18) А сегодня у Сони был, на похмелъе ходил просить! Хе-хе-хе! (А segodnya u Soni bil, na pohmele hodil prosit! He-he-he!) [Достоевский, p. 27]

- (19) 今日はソーニャのところへ行って、迎え酒の代をねだって来ましたよ！へへへ！
[米川訳, p. 23]

- (20) ところできょうはソーニャのところへ行ってきましたよ、迎え酒の飲み代をねだりにね！へ、へ、へ
[小沼訳, p. 22]

- (21) でも今日、ソーニャのところへ行ってきたんですよ、酒代をせびりにです！は、は、は！
[亀山訳<1>, p. 55]

(19)(20)の「へへへ！」「へ、へ、へ」からは、「照れたり、人にへつらったりして笑」っている様子が、(21)の「は、は、は！」からは「屈託なく快活」に笑う様子がうかがえる。(21)は、ロシア語の“Хе-хе-хе!”が「忍び笑い、独り言」の小さな笑い声であることを考えると、原文の笑い声を忠実に訳したとはいいがたい。誤解のないように書くが、筆者はここで翻訳者の誤訳を指摘したいわけではないし、これが誤訳なのかも判断できない。というのも、翻訳者が、日本語の「へへへ」の発話キャラクタがマルメラードフという人物にふさわしくないと判断して、原文の音とは異なる笑い声を当てた可能性があるからである。

(22)は、弁護士ルージン（中年男性）の、間借りさせてくれている知人に対する発話のロシア語原文、(23)～(25)はその和訳である。

- (22) Еще бы! Собственноручно отколотили. Понятно, что совестно, хе-хе-хе!
(Eshe by! Sobstvennoruchno otkolotili. Ponyatno, chto sovestno, he-he-he!)
[Достоевский, p. 446]

- (23) そりゃそうだろうとも！自分が手をくだしてなぐったんだからね。気がさすのはわかりきってるさ。へ、へ！
[米川訳, p. 359]

- (24) 言うまでもないさ！その手を上げて殴ったんだからね。きまりがわるいに決まってるよ、へ、へ、へ！
[小沼訳, p. 339]

- (25) そりゃそうでしょう！その手でなぐった相手ですものね。気がひけるのもわかりますよ、は、は、は！
[亀山訳<3>, p. 22]

(23)(24)の「へ、へ！」「へ、へ、へ！」からは「人をばかにしてせせら笑う」様子が、(25)の「は、は、は！」からは「屈託なく快活」に笑う様子がうかがえる。(25)も前述の(21)同様、ロシア語の「忍び笑い、独り言」とは異なる大きな笑い声を表すオノマトペが使われており、原文の小さな笑い声を忠実に訳したとはいいがたい。

(26)は予備判事ポルフィーリー(中年男性)のラスコーリニコフに対する発話のロシア語原文、(27)～(29)はその和訳である。これも前述のルージンの例と同様、(27)(28)が「人をばかにしてせせら笑う」様子を、(29)は「屈託なく快活」に笑う様子をうかがわせる。(29)は、促音「っ」が加えられ、さらに躍動感のある笑い声として描かれている。

(26) Вон реформа идет, и мы хоть в названии-то будем переименованы, хе! хе!
хе! (Von reforma idet, i my hot v nazvanii-to budem pereimenovaty, he! he! he!)
[Достоевский, p. 410]

(27) このごろ改革が始まりかけていますから、われわれもせめて、名称だけでも変えてもらえるだろうと、囑望しているしだいですが、へ、へ、へ! [米川訳, p. 330]

(28) 幸い改革が進行中ですからね、私たちもせめて名称だけでも変えてもらいたいものだと思いますよ、へ、へ、へ! [小沼訳, p. 311]

(29) いま、例の革命が進んでいるところですから、せめても名前ぐらひは変えてもらえるでしょうが、はっ、はっ、はっ! [亀山訳<2>, p. 350]

(30)は、主人公ラスコーリニコフ(20代男性)が、彼の体調を心配して駆けつけた友人たちとの会話の合間に、一人心の中で笑う内言のロシア語原文、(31)～(33)はその和訳である。これも「人をばかにしてせせら笑う」例であるが、(31)(32)が辞書通り「へ、へ、へ!」と訳しているのに対し、(33)は笑い声ではなく「ざまあみろ!」という訳を当てることにより、より攻撃的で快活な印象を与えている。

(30) Они и не знают, что я ходить могу, хе-хе-хе! (Oni i ne znayut, chto ya hodit mogu, he-he-he!)
[Достоевский, p. 155]

(31) おれの歩けることを知らないんだ、へ、へ、へ! [米川訳, p. 123]

(32) おれが歩けることを、やつらは知りもしないんだ、へ、へ、へ! [小沼訳, p. 115]

(33) おれがこうして歩けることも知らない、ざまあみろ! [亀山訳<1>, p. 301]

(34)は、ニコジーム・フォミッチ警察署長(中年男性)の、殺人現場にいたドイツ人の証人についての部下に対する発話のロシア語原文、(35)～(37)はその和訳である。

(34) Русский молебен хочет служить, хе-хе! (Russkiy moleben hochet sluzhit, he-he!)
[Достоевский, p. 128]

(35) ロシヤ式の感謝祈祷でもやりかねない勢いだぜ-は、は… [米川訳, p. 101]

(36) ロシヤ式の感謝祈祷をやるんだそうだよ、へ、へ! [小沼訳, p. 95]

(37) あのドイツ人、ロシア式に感謝の祈祷をあげたいそうだ、はっ、はっ、はっ!…
[亀山訳<1>, p. 101]

これも「人をばかにしてせせら笑う」例であるが、辞書通り「へ、へ!」と訳しているのは(36)のみである。米川は他の3人の登場人物には辞書通りの訳を当てたが、(35)で初めて「は、は」という訳を当てている。また、(37)は(29)と同様、促音「っ」を加え、躍動感のある笑い声を表している。亀山は4人の男性すべての“Xe-xe-xe!”を一貫して辞書通りに訳さず、「屈託なく快活」な笑い声や攻撃的なセリフに訳している。先行研究では、「へへへ」は「人をばかにしてせせら笑う」または「照れたり、人にへつらったりして笑う」声とされている。上に示したロシア語原文において、もし「へへへ」がこのような笑い声というだけなら、忍び笑いを漏らした4人の登場人物が、「人をばかにしてせせら笑」ったり「照れたり、人にへつらったりして笑」ったりしていたと解釈して「へへへ」と訳しても問題はないはずである。しかし、米川の(35)および亀山の訳ではあえて原文の音とは異なる笑い声が当てられた。このことから、2名の翻訳者は日本語の「へへへ」の発話・思考キャラクタが登場人物と合わないと感じ「ははは」という訳を当てた、つまり「へへへ」はどのような笑い声かを示すだけでなく、何らかの発話キャラクタを連想させると考えることができる。

以上のとおり、“Xe-xe-xe!”は、ロシア語原文には男性の笑い声の表現としてセリフおよび内言に現れ、その声の主は酔っ払いの退職官吏から警察署長までと幅広いが、その和訳になると翻訳者や登場人物によって違いが生じることがわかった。

5.2 『罪と罰』に現れる「笑い方の表現-表現キャラクタ」の関係

ここでは、笑い方の表現と表現キャラクタの関係について、『罪と罰』に現れた“захохотать(zahohotat)”“(за)хихикать ((za)hihikat)”“улыбаться (ulybatsya)”“с улыбкой (s ulybkoy)”を、事例を挙げながら見ていく。これらの表現は動作主が男性の場合も女性の場合も使われるが、性別以外の特徴を見るため、本稿では性別を統一して例示する。読者の理解のたすけとなるよう、あらかじめ結論を述べておけば、笑い方の表現に関して、ロシア語の一つの動詞や表現に対し、翻訳者や動作主によって異なる和訳が当てられることがあることがわかった。また、当てられる和訳、特にオノマトペによって思い浮かべられる表現キャラクタが異なる可能性があること、ロシア語原文に笑い方の細かい描写がある場合、和訳にオノマトペが使用されず、翻訳者による表現キャラクタの違いがそれほど大きくないことも明らかになった。

5.2.1 захохотать (zahohotat, 大笑いし始める)

“захохотать”の男性用過去形“захохотал”は、翻訳者や登場人物によって当てられる和

訳に違いが見られる。(38)は、安料理店で大学生とおしゃべりをする若い将校(士官)の様子を描いたロシア語原文、(39)~(41)はその和訳である。

(38) Офицер опять захохотал. (Ofitser opyat zahohotal.) [Достоевский, p. 81]

(39) 将校はまたからからと笑った。 [米川訳, p. 65]

(40) 将校はまた大きな声で笑った。 [小沼訳, p. 61]

(41) 士官はまた笑いだした[後略]。 [亀山訳<1>, p. 157]

(42)は、前述の若い将校(士官)とおしゃべりする大学生の発話と様子を描いたロシア語原文、(43)~(45)はその和訳である。

(42) Вот ведь тоже феномен! -вскричал студент и захохотал. (Vot ved tozhe fenomen! -vskrichal student i zahohotal.) [Достоевский, p. 79]

(43) 「え、これもちよつと類のない話じゃないか!」と大学生はいつて、からからと笑った。 [米川訳, p. 64]

(44) 「しかしこれも一つの珍しい現象だよ!」と大学生は叫んで、声をあげて笑った。 [小沼訳, p. 60]

(45) 「こっちも、ちょいとお目にかかれないしろものでね!」学生はそう叫ぶと、大声で笑ってみせた。 [亀山訳<1>, p. 155]

(46)は、娘に飲み代をもらいに行ったと酒場で話すマルメラードフに対して、新しく店に入ってきた客の一人が発したセリフのロシア語原文、(47)~(49)はその和訳である。“захохотал”の後ろに“во всю глотку (vo vsyu glotku, のど全体で)”という表現が付け加えられており、翻訳者による訳の違いが見られる。

(46) Неужели дала? – крикнул кто-то со стороны из вошедших, крикнул и захохотал во всю глотку. (Neuzheli dala? – kriknul kto-to so strony iz voshedshih, krikhul i zahohotal vo vsyu glotku.) [Достоевский, p. 27]

(47) 「で、くれたかい?」わきのほうから、いま来た連中のひとりがわめいた。わめいて、のどいっぱいに笑いだした。 [米川訳, p. 23]

(48) 「くれたのかね?」と新しく入って来た連中の一人が横あいからわめいた。そし

てわめき終わると大声をあげて笑い出した。

[小沼訳, p. 22]

- (49) 「で、くれたのかよ？」入ってきたばかりの客のひとりが、横合いから大声で叫び、げらげら笑いだした。
[亀山訳<1>, p. 55]

以上のとおり、ロシア語の“захохотать”は大学生や将校、酒場の客など様々な登場人物の笑い方を表すのに使われているが、当てられる和訳にはオノマトペあり、オノマトペなしといった違いが見られた。オノマトペなしは「大きな声で笑った」「(大声で／のどいっばいに) 笑いだした／笑い出した」「(声をあげて笑った)」「大声で笑ってみせた」という表現が使われ、連想される表現キャラクタに大きな違いはないようである。オノマトペありの際に用いられた「からから」「げらげら」について、先行研究では、「からから」は「高く笑う」または「屈託なく笑う」《男性》的な笑い声、「げらげら」は「大声で笑う」または「遠慮なしにばかにし」て笑う声や様子を表すとされる。「げらげら」の動作主を示す先行研究は見当たらないが、母語話者である筆者の内省では、《品が低い若者・女性・子供》が思い浮かぶ。《上品なお嬢様》のようにそもそも大声で笑うことがない人物以外なら、どのような動作主にも使える辞書通りの「大笑いし始める」とは異なり、「からからと笑う」や「げらげら笑う」はそれぞれ特定の表現キャラクタを連想させる。このことから、オノマトペによって思い浮かべられる表現キャラクタが異なる可能性があると言える。

5.2.2 хихикать (hihikat, くすくす笑いする、忍び笑いする)および захихикать (zahihikat, ひひと笑い出す、“хихикать”し始める)

“хихитать”とその男性用過去形“хихикал”および“захихить”の男性用過去形“захихикал”は、翻訳者や登場人物によって当てられる和訳に違いが見られる。どの和訳にも笑い声や笑い方のオノマトペが使われており、それらは特定の表現キャラクタを連想させる。米川は一貫して「ひひひ」、小沼は一貫して「くすくす」というオノマトペを用いている。亀山は登場人物によって「くすくす」と「へらへら」を使い分けている。

(50)は、酒場のボーイ(小僧)たちがマルメラードフの身の上話を聞いて笑い出す様子を描いたロシア語原文、(51)～(53)はその和訳である。

- (50) Мальчишки за стойкой стали хихикать. (Malchishki za stoykoy stali hihikat.)
[Достоевский, p. 17]

- (51) 小僧たちは帳場の向こうでひひひと笑いだした。
[米川訳, p. 14]

- (52) スタンドの向こうの小僧たちはくすくす笑いはじめた。
[小沼訳, p. 14]

- (53) カウンターの向こうにいるボーイたちは、くすくすしのび笑いを漏らしはじめた。
[亀山訳<1>, p. 33]

(51)では「ひひひ」と「気味の悪い、または下品」な笑い声を上げていたボーイたちが、(52)(53)では「くすくす」と「他人に聞こえないように」「ひそかに笑」っている。(53)は「しのび笑いを漏らす」という表現が加えられており、「くすくす笑う」より否定的な印象を受ける。

(54)は、予備判事ポルフィーリーが主人公ラスコーリニコフに対して発話する場面のロシア語原文、(55)～(57)はその和訳である。

(54) –А сюрпризик-то не хотите разве посмотреть? –захихикал Порфирий, опять схватывая его немного повыше локтя и останавливая у дверей. (– А syurprizik-to ne hotite razve posmotret? – zahihikal Porfiriya, opyat shvatyvaya ego nemnogo povyshe loktya i ostanavlivaya u dverey.) [Достоевский, p. 426]

(55) 「ときに、一つ思いがけない贈り物があるんですが、見たかありませんかね？」
またもや彼のひじの少し上をつかんで、戸口で引き止めながら、ポルフィーリーはひひひと笑った。
[米川訳, p. 343]

(56) 「ところでちょっとした思いがけないプレゼントがあるんですが、見たくはありませんか？」と言ってポルフィーリーは、またもや彼の肘の少し上のほうをつかんで、戸口で相手を引きとめながらくすくすと笑った。
[小沼訳, p. 324]

(57) 「そうだ、ちょっとしたプレゼントがあるんですが、これからごらんになる気はありませんか？」ポルフィーリーは、またしても彼の肘の少し上のあたりをつかみ、ドアのそばで彼を引きとめると、くすくす笑い声を立てた。[亀山訳<2>, p. 381]

これも先の例と同様に、(55)では「ひひひ」と「気味の悪い、または下品」な笑い声を上げるポルフィーリーが、(56)(57)では「くすくす」と「他人に聞こえないように」「ひそかに笑」っている。

(58)は、弁護士のルージン（ピョートル・ペトローヴィッチ）が、間借りさせてくれている知人の話を聞いて笑う場面のロシア語原文、(59)～(61)はその和訳である。

(58) Петр Петрович хихикал слушая, но без особого увлечения. Он даже мало и слушал. (Petr Perovich hihikal slushaya, no bez osovogo uvlecheniya. On dazhe malo i slushal.) [Достоевский, p. 460]

(59) ルージンはそれを聞きながら、ひひひと笑った。しかし、かくべつ身を入れている様子はなかった。それどころか、ろくすっぽ聞いてもいなかった。
[米川訳, p. 370]

(60) ピョートル・ペトローヴィッチは彼の話の聞きながらくすくす笑っていた、しかし特に身をいれている様子は見えなかった。いやむしろ話なんかろくすっぽ聞いてい

なかったのである。

[小沼訳, p. 351]

- (61) ルージンは、話に耳を傾けながらへらへら笑っていたが、それほど熱を入れて聞いているわけではなかった。それどころか、ほとんど耳に入っていなかった。

[亀山訳<3>, p. 49]

(59)では「ひひひ」と「気味の悪い、または下品」な笑い声を上げるルージンが、(60)では「くすくす」と「他人に聞こえないように」「ひそかに笑」っている。(61)では「へらへら」と「不真面目な態度で、理由もなく笑」っている。

以上のとおり、ロシア語“хихитать”および“захихить”は酒場のボーイ、予備判事、弁護士の笑い方の表現として使われているが、当てられる和訳にはオノマトペが使われることがわかった。使用されたオノマトペは「ひひひ」、「くすくす」、「へらへら」であり、先行研究では、「ひひ」は「気味の悪い、または下品」な笑い声、「くすくす」は「他人に聞こえないように」「ひそかに笑う」声やその様子、「へらへら」は「不真面目な態度で、理由もなく笑う」様子を表すとされる。この3つの笑いの主に関する研究は見当たらないが、母語話者である筆者の内省では、「ひひひ」は《不気味な人物》《下品な人物》を、「くすくす」は《控えめな若者》を、「へらへら」は品も格も低い《頭の悪そうな人物》を連想させる。「忍び笑いする」という辞書の訳からは《豪快でない人物》《やや悪玉》が連想され、直感的にオノマトペありとは思ひ浮かべられる表現キャラクタが異なると予想される。

5.2.3 улыбаться (ulybatsya, 微笑する、笑いかける)

動詞“улыбаться”の女性用過去形“улыбалась (ulibalas)”およびその完了体“улыбнуться (ulibnutsya)”の女性用過去形“улыбнулась (ulibnulas)”も翻訳者や登場人物によって和訳が異なり、そこから連想される表現キャラクタに違いが見られる。

(62)は、主人公ラスコーリニコフの妹ドゥーニャ(20代女性)の様子を描写したロシア語原文、(63)~(65)はその和訳である。ラスコーリニコフの友人が、不安を感じているドゥーニャを元気づけようと慰め、ドゥーニャがそれに応えようとする場面である。

- (62) Дуня улыбнулась и протянула ему руку, но забота не сходила с ее лица.

(Dunya ulibnulas i protyanula emu ruku, no zabota ne shodila s ee litsa.)

[Достоевский, p. 119]

- (63) ドゥーニャはにっこり笑って、彼に手をさし伸べたが、心痛の色はその顔から去らなかった。

[米川訳, p. 303]

- (64) ドゥーニャはにっこりと笑って彼のほうへ手を差しのべた、しかし心労の色はまだその顔から消え去ってはいなかった。

[小沼訳, p. 285]

- (65) ドゥーニャはにっこり笑みを浮かべ、手を差し出したが、その顔から不安の色は消

えなかった。

[亀山訳<3>, p. 285]

(63)~(65)から、「にっこり」と「明るい表情で笑う」様子がうかがえる。ドゥーニャは若く、賢く、美しい女性であることが影響してか、3名の翻訳者が「にこにこ」類の「にっこり」を用いている。ドゥーニャは《上品な善玉》キャラとして描かれやすいようである。

同じ女性でも、ドゥーニャとは異なる和訳を当てられている登場人物がいる。(66)は、カテリーナ(カチェリーナ・イワーノヴナ、中年女性)が夫マルメラードフの葬儀を終え、その後の食事会でドイツ人女性リップヴェフゼリ夫人(アマリヤ・イヴァーノヴナ、アマリヤ・イワーノヴナ)に笑いかける場面のロシア語原文、(67)~(69)はその和訳である。

(66) Катерина Ивановна хоть и улыбнулась, но тотчас же заметила, что Амалии Ивановне не следует по-русски анекдоты рассказывать. (Katerina Ivanovna hot i ulybnulas, no totchas zhe zametila, chto Amalii Ivanovne ne sleduet po-russki anekdoty rasskazyvat.) [Достоевский, p. 472]

(67) カチェリーナもにやりと笑いはしたものの、すぐそのあとで、アマリヤ・イヴァーノヴナなんかはロシア語でしゃれた話をするがらじゃない、と注意した。

[米川訳, p. 380]

(68) カチェリーナ・イワーノヴナはその話に思わずにこりとしたが、すぐさまアマリヤ・イワーノヴナなどはロシア語で笑い話をする柄ではないときめつけた。

[小沼訳, p. 360]

(69) カテリーナはにやりとしたが、リップヴェフゼリ夫人に向かって、ロシア語で小断なんぞしなさんな、とすぐさま注意した。

[亀山訳<3>, p. 71]

(67)(69)からは「意味ありげな笑いを浮かべる」様子が、(68)からは「うれしそうに一度ほえむ」様子がうかがえる。また、(68)では「にこにこ」類の「にこり」が使われており、カテリーナが《善玉》キャラとして描かれている。一方、(67)(69)では「にやにや」類の「にやり」が使われており、カテリーナが《下品な善玉》または《悪玉》として描かれている。“улыбаться”は「微笑する、笑いかける」という意味であり、「冷たく」や「顔をゆがめて」などの否定的な意味の説明を伴わない場合、肯定的な笑い方を表すことが多い。(67)(69)は文脈的にその微笑が「皮肉的」とであると判断し、「にやり」という和訳を当てたとも推察できるが、オノマトペなしの「微笑を浮かべた」「笑みを浮かべた」を当てても問題はなかったはずである。2名の翻訳者が、「微笑した」「微笑を浮かべた」の表現キャラクターがカテリーナにふさわしくないと感じ、あえて「意味ありげな笑い」方の表現を用いたと予想される。参考までに、前述のドゥーニャの微笑が「にやり」と訳されている箇所はない。

また、どのような笑い方が細密な描写がある場合、“улыбалась”のみの描写の和訳よりも、翻訳者による違いが小さくなるようである。(70)は、警察署に現れたドイツ人女性(中

年)が、すすめられた椅子に腰を下ろし微笑を浮かべた場面のロシア語原文、(71)～(73)はその和訳である。“улыбалась”の後ろに“трусливо и нахально вместе (truslivo i nahalno vmeste, 臆病に同時に厚かましく)”という表現が付け加えられている。

- (70) Но дама, очевидно, робела того, что занимает полкомнаты и что от нее так несет духами, хотя и улыбалась трусливо и нахально вместе, но с явным беспокойством. (No dama, ochevidno, robela togo, chto zanimaet polkomnaty i chto ot nee tak neset duhami, hotya i ulybalas truslivo i nahalno vmeste, no s yavnym bespokoystvom.) [Достоевский, p. 117]

- (71) けれど婦人は、自分が部屋を半分も占領して、香水の匂いをぷんぷんさせるのが、いかにもすまない様子で、おくびょうらしくせに、ずうずうしいところもあるような微笑を浮かべていたが、とにかく明らかに不安らしいふうだった。

[米川訳, p. 92]

- (72) しかし夫人は、自分が部屋を半分も占領したのと、香水のかおりがあまりにもつよすぎることを、どうやら、ひどく気にしている様子だった。そのくせ明らかに不安の色を見せながらも、おずおずした、しかも図々しい微笑を浮かべていた。

[小沼訳, p. 87]

- (73) もっとも婦人は、自分が部屋の半分以上を占領しているうえ、香水のにおいをぷんぷんさせているのに気がねしているらしく、はにかみを含んだ、それでいて厚かましい笑みを浮かべていたが、いかにも落ちつかない様子だった。

[亀山訳<1>, pp. 225-226]

(71)～(73)の和訳を見ると、“улыбалась”の部分は「微笑を浮かべていた」「笑みを浮かべていた」とオノマトペが使われておらず、翻訳者による違いはほとんど見られない。

以上のとおり、ロシア語の“улыбаться (および“улыбнуться”)”は、20代女性、中年女性の笑い方の表現として使われているが、その和訳には違いがあることがわかった。和訳はオノマトペありとオノマトペなしの場合があり、オノマトペありの場合「にやり」「にこり」「にっこり」などが使われ、それぞれ表現キャラクターが異なる可能性があることが明らかになった。また、ロシア語原文の表現が細密な場合、和訳にオノマトペが使われず、翻訳者による和訳の違いが小さくなることもわかった。オノマトペなしの「微笑する」「笑いかける」「微笑を浮かべる」「笑みを浮かべる」という笑い方の動作主に言及した先行研究は見当たらず、オノマトペありの表現に比べ表現キャラクターとの結びつきは低いと予想されるが、確かに特定の動作主を連想させる。筆者の内省では、「微笑する」「微笑を浮かべる」は《下品でない女性・子供》《上品な男性》を、「笑いかける」は、《心あたたかい人物》を、「笑みを浮かべる」は《やさしい人物》を連想させる。但し、「冷たい／く」「悲しい／く」「暗い／く」などの否定的な説明が前に付けられる場合もあるため、「にっこり」「にこ

にこ」などから連想する表現キャラクタほど《明るい人物》ではない。

5.2.4 с улыбкой (s улыbkoy, にっこりして、笑みを浮かべて)

ロシア語“с улыбкой”は、一人の登場人物の笑い方を表現する際でも翻訳者によって和訳に差が見られる。和訳はオノマトペあり、オノマトペなしの場合があり、オノマトペありの場合、「にやにや」「にこにこ」などが使われ、それぞれから連想される表現キャラクタが異なる。また、ロシア語原文の表現が細密な場合、和訳にはオノマトペが使用されず翻訳者による和訳の違いが小さくなる。

(74) は、主人公ラスコーリニコフと警察副署長が言い合いをしているのを、若い男性の事務官(記録係)が笑いながら見ている場面のロシア語原文、(75)～(77)はその和訳である。“с улыбкой”という笑い方の表現に、3名の翻訳者が異なる和訳を当てており、事務官(記録係)の表現キャラクタが翻訳者によって異なることが見て取れる。

(74) Письмоводитель с улыбкой смотрел на них. (Pismoditel s улыbkoy smotrel na nih.) [Достоевский, p. 119]

(75) 事務官は微笑をふくんで、ふたりをながめていた。 [米川訳, p. 93]

(76) 記録係の男はにこにこ笑いながら二人の様子を眺めていた。 [小沼訳, p. 88]

(77) 事務官はにやにやしながらふたりをながめていた。 [亀山訳<1>, p. 228]

(75)は、「微笑を浮かべる」ではなく「ふくむ」という動詞が使われているため、やや「含み笑い」を思わせる。(76)では「うれしそうに笑みを浮かべ続け」ている様子が、(77)では「意味ありげにうす笑いを浮かべる」様子がうかがえる。(76)では「にこにこ」類のオノマトペが使われており、《上品な善玉》キャラを、(77)では「にやにや」類のオノマトペが使われており、《下品な善玉》または《悪玉》キャラを連想させる。(75)の「微笑をふくむ」や「含み笑いをする」という笑い方の動作主に言及した先行研究は見当たらないが、筆者の内省では《下品でない女性・子供》《上品な男性》を連想させる「微笑を浮かべる」に比べ、やや品が低い人物を連想させる。

また、前述の“улыбаться”同様、どのような笑い方が細密な描写がある場合“с улыбкой”のみの描写の和訳よりも、翻訳者による違いは大きくない。(78)は、(74)～(77)の事務官がラスコーリニコフに対して笑みを浮かべる場面のロシア語原文、(79)～(81)はその和訳である。“с улыбкой”に相当する部分のどの和訳にもオノマトペが使われておらず、「微笑を浮かべながら」「笑みを浮かべながら」とほとんど同じ和訳が当てられている。

(78) Письмоводитель смотрел на него с снисходительной улыбкой сожаления, а вместе с тем и некоторого торжества, как на новичка, которого только что начинают обстреливать: <Что, дескать, каково ты теперь себя чувствуешь?>

(Pismovoditel smotrel na nego s snishoditelnoy ulybkoy sozhaleniya, a vmeste s tem i nekotorogo torzhestva, kak na novichka, ktorogo tolko chto nachinayut obstrelivat: <Chto, deskat, kakovo ty teper sebya chuvstvuesh?>)

[Достоевский, pp. 119-120]

- (79) 事務官は『どうだい、お前、今どんな気持ちがするね?』とでもいいかげんな様子で、今みんなから包囲攻撃を受け始めたばかりの新参者にたいする憐憫と、同時にある勝利感をふくんだ寛容な微笑を浮かべながら、彼を見つめていた。

[米川訳, p. 94]

- (80) 記録係の男は、同情のこもった、と同時に、たったいまみんなから包囲攻撃を受けはじめたばかりの新参者を見ながら、『どうだい、どんな気持ちがするかね?』と思うときのような、いくらか勝ち誇ったような、寛大な微笑を浮かべながら、彼の様子を眺めていた。

[小沼訳, p. 89]

- (81) 事務官は、哀れみのこもる寛大な笑みを浮かべながら、彼を見ていた。と同時に、そこには、砲火を浴びせられたばかりの新兵に対し、「どうだい、今の気分は?」とでも言わんばかりの、どこかしら勝ちほこったような笑いがふくまれていた。

[亀山訳<1>, p. 230]

以上のとおり、ロシア語“с улыбкой”は一人の登場人物の笑い方を表現する際も翻訳者によって和訳に差が見られることがわかった。また、和訳はオノマトペあり、オノマトペなしの場合があり、オノマトペありの場合、「にやにや」「にこにこ」などが使われ、それぞれから連想される表現キャラクターが異なることも明らかになった。さらに、ロシア語原文の表現が細密な場合、和訳にはオノマトペが使用されず翻訳者による和訳の違いが小さくなることもわかった。

VI 考察

ここでは、Iの疑問点について、IVの意識調査の結果を参考に、Vの観察を考察する。以下、表記の簡略化のため、「は、は、は!」「はっ、はっ、はっ!」などはすべて「ははは」、「へ、へ、へ!」「へへへ!」は「へへへ」、「ほ、ほ、ほ!」は「ほほほ」と書く。

笑い声の表現について、IVのロシア語母語話者の回答を見ると、ロシア語の“Ха-ха-ха!”は特定の笑いの主を連想させない、だれにでも使える笑い声であり、『罪と罰』でも男女どちらの笑い声としても使われる。一方、日本語においては男性の場合原文の音のまま「ははは」と和訳され、女性の場合登場人物によって和訳に差が生じることがあることがわかった。このことから、日本語の「ははは」は登場人物によって使用が限られる可能性がうかがえる。日本語社会には、「ははは」と笑う女性も、「ほほほ」と笑う女性もいるが、後者は先行研究では《上品な女性》の笑い声とされている。「ははは」は「屈託なく快活」な

笑い声を示すとされ、笑いの主を特定するような先行研究は見当たらない。だが、原文の音に対応させた「ははは」をあえて避けた翻訳者がいたということは、それが何らかの発話キャラクタを連想させ、「ははは」の発話キャラクタが登場人物にふさわしくないと翻訳者が考えた可能性がある。また、ロシア語の“Хе-хе-хе!”は様々な男性の登場人物の笑い声の表現として現れるが、その和訳になると翻訳者や登場人物によって違いが生じることがわかった。IVのロシア語母語話者の回答を見ると、“Хе-хе-хе!”は特定の笑いの主を連想させない、だれにでも使える笑い声であるが、『罪と罰』では笑いの主が男性に限られた。一方和訳では、3名中2名の翻訳者が「へへへ」を当てない登場人物がいた。さらに、まったく「へへへ」を使用しない翻訳者もあり、「へへへ」がロシア語の“Хе-хе-хе!”ほど使いやすい表現でないことがわかる。先行研究では、「へへへ」は「人をばかにしてせせら笑う」「照れたり、人にへつらったりして笑う」声とされているが、この説明以外に、特定の発話・思考キャラクタを連想させる表現である可能性がある。ロシア語の“Ха-ха-ха!”“Хе-хе-хе!”に比べ、日本語の「ははは」「へへへ」は笑いの主を特定する度合い、つまり役割語度が高いと考えられる。このことから、“Ха-ха-ха!”“Хе-хе-хе!”および「ははは」「へへへ」に関しては、日本語がロシア語より「笑い声の表現-発話キャラクタおよび思考キャラクタ」の関係のヴァリエーションが多い可能性があると言える。今後、「ははは」「へへへ」と笑う、または笑わないのはどのような発話・思考キャラクタなのかについて調査する必要があるだろう。

笑い方の表現について、ロシア語の“захохотать”は、IVのロシア語母語話者の回答を見ると、特定の笑いの主を連想させない、だれにでも使える笑い声であり、『罪と罰』でも様々な男性の笑い方として使用されている。“хихикать(および“захихикать”)”は、IVの意識調査では「若い女性や子供を連想させる」というロシア語母語話者の回答を得たが、『罪と罰』では様々な男性の笑い方を表すのに使われており、回答と実際の使用には違いが見られた。和訳では、“захохотать”、“(за)хихикать”どちらにおいても、翻訳者や登場人物によって当てられる和訳に違いがあった。前者はオノマトペなしと「からから」「げらげら」のオノマトペありの場合が、後者には「ひひひ」「くすくす」「へらへら」といったオノマトペありの場合が観察された。これらの笑いの主を特定するような研究は見当たらないが、筆者の内省から連想される表現キャラクタは異なる可能性があることが示された。また、ロシア語の“улыбаться”“с улыбкой”は、IVのロシア語母語話者の回答で特定の笑いの主を連想させない笑い方とされ、『罪と罰』でも様々な女性の笑い方として使用されていた。和訳では、ロシア語原文にどのような笑い方かを示す細かい描写がないとき、それぞれ表現キャラクタが異なる「にこり」「にっこり」「にこにこ」の「にこにこ」類と「にやり」「にやにや」の「にやにや」類のオノマトペが使われた。反対に、ロシア語原文に笑い方の細かい描写がある場合、和訳にオノマトペが使われず、翻訳者による和訳の違いが小さくなることもわかった。このことから、本稿で扱った笑い方の表現に関しては、ロシア語原文に細かい描写がない場合、日本語がロシア語より「笑い方の表現-表現キャラクタ」の関係のヴァリエーションが多く、オノマトペの存在と連想される表現キャラクタが深く関係している可能性が示唆された。

以上から、これまでの役割語研究、キャラクタ研究で示されてこなかった、笑い声の役

割語と発話キャラクタ、内言と思考キャラクタ、笑い方のキャラクタ動作の表現と表現キャラクタの関係においても、日本語においてヴァリエーションが多いことがわかった。

最後に、本稿では40年以上前に出版された翻訳版と近年出版されたものを分析に使用したが、“Ха-ха-ха!”を「ほほほ」と訳すか「ははは」と訳すか、“Хе-хе-хе!”を「へへへ」と訳すか「ははは」や別の言葉を使用するか、“(за)хихикать”の訳に「ひひひ」というオノマトペを使用するかしないかといった点において、新旧翻訳版に差が見られた。この差が言葉の意味変化によるものなのか、それとも翻訳者個人に由来するものなのかは、本研究からは判断できない。本稿で使用した翻訳版の翻訳者以外のものを観察する必要がある。

VII おわりに

本稿では、ロシアの作家ドストエフスキーの『罪と罰』で使われている笑い声の表現“Ха-ха-ха!”および“Хе-хе-хе!”と、笑い方の表現“захохотать”“(за)хихикать”“улыбаться”“с улыбкой”を考察対象とし、3名の翻訳者の和訳を比較した。その結果、笑い声の表現に関して、“Ха-ха-ха!”はロシア語では男性、女性どちらにも使われる一方、日本語においては男性の場合そのまま和訳され、女性の場合登場人物によって和訳に差が生じることがあること、“Хе-хе-хе!”は、ロシア語原文には様々な男性の登場人物の笑い声の表現として現れるが、その和訳になると翻訳者や動作主によって違いが生じること、当てられる和訳によって思い浮かべられる発話キャラクタおよび思考キャラクタが異なることがわかった。このことから、本稿で扱った笑い声の表現に関しては、日本語がロシア語より「笑い声の表現-発話キャラクタおよび思考キャラクタ」の関係のヴァリエーションが多いことがわかった。笑い方の表現に関しては、同じロシア語でも動作主が変わると異なる和訳を当てられることがあること、一つのロシア語に対し翻訳者によって異なる和訳が当てられることがあること、当てられる和訳、特にオノマトペによって思い浮かべられる表現キャラクタが異なる可能性があることがわかった。また、ロシア語原文に笑い方の細かい描写がある場合、和訳にオノマトペが使用されず、翻訳者による違いがそれほど大きくないことも明らかになった。このことから、本稿で扱った笑い方の表現に関しては、ロシア語原文に細かい描写がない場合、日本語がロシア語より「笑い方の表現-表現キャラクタ」の関係のヴァリエーションが多く、そのつながりが細かいことがわかった。またそのつながりにはオノマトペが深く関係している可能性がうかがえた。但し、本稿の観察から「微笑をふくむ」や「含み笑いをする」といったオノマトペなしの表現も特定の表現キャラクタを連想させる可能性が示唆されており、オノマトペなしの表現の動作主に関するさらなる調査の必要性を感じる。

また、本研究は一人の作家の一作品しか扱っておらず、データは十分と言えない。今後、分析対象を他の作家の作品にも広げる必要がある。また、発話キャラクタと表現キャラクタのラベル付けは、羅(2011)と筆者の内省によるものであった。これらを裏付けるため、日本語、ロシア語両母語話者を対象とした意識調査も今後行うべきであろう。さらに、本稿ではロシア語のみを対象としたが、今後他言語へ調査を広げ、それらとの比較からさらに日本語における言葉とキャラクタの関係の特徴を明らかにしていく必要があるだろう。

本研究の結果は、話者の言葉遣いだけでなく、自分を含むだれかの動作や内言を表現する場合、その動作主や思考の主のキャラクタを特定してしまうという日本語の特徴を部分的に示すものである。このような日本語の特徴への理解が、日本語非母語話者の文学作品などの読解や、日本語母語話者とのコミュニケーションの円滑化を助けるものになることを期待する。

(神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)

注

- 1) 本稿では、定延(2011)に倣い、キャラクタの名前を《坊っちゃん》や《子供》のように《 》で示す。
- 2) 金水(2003: 205)は、「ある特定の言葉遣い(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができる、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。」と定義した。が、金水(2015)は金水(2003)の定義についていくつかの問題点を指摘し、「(社会・地域)方言のステレオタイプ」すなわち、「(実在と否とを問わず)社会的グループと結びつけられた話し方のパターンを役割語という」との修正を加えている。本稿では、「すべてのことばは「役割語」である」という定延(2011)の指摘に倣い、修正前の金水(2003)の定義を用いることとする。
- 3) 鄭(2005)は、日本語は韓国語に比べ役割語としての文末形式が発達しており、日本語で描ける登場人物の性差を、韓国語訳では表現しにくいことを指摘している。また、山口(2007)によると、日本語は自称詞や文末表現が豊富で、「足し算式」に様々な役割語が生み出されるが、英語の役割語にはそのような生産性はないという。さらに、福嶋(2012)はスペイン語には性差による話体の違いがなく、また「《博士》語」や「《お嬢様》語」といった役割語はスペイン語において一般的でないとしている。
- 4) その他、「けらけら」は子供や若者、「ころころ」は子供が笑い主であるとの指摘もあるが(小野 2007)、本稿ではこの二つについては触れない。本稿で取り上げた「からから」「げらげら」「ひひひ」「くすくす」「へらへら」の笑いの主に関する文献は見当たらない。
- 5) Достоевский Федор Михайлович, 1866, *ПРЕСТУПЛЕНИЕ И НАКАЗАНИЕ*, Москва: Издательство АСТ.
- 6) 露和辞典(『コンサイス露和辞典[第5版]』三省堂)と露露辞典(С. И. Ожегов《Толковый словарь русского языка》Издательство Мир и Образование)を使用した。
- 7) 調査は1名の対象者に関しては筆者が Skype を用いて行い、残りの3名に関してはノビシルスク国立工科大学講師の大内将史先生に調査代行のご協力をいただいた。
- 8) 『罪と罰』では女性の登場人物の内言は描かれない。

参考文献

- ドストエフスキー, F. M., (1862) 望月哲男 (訳, 2013) 『死の家の記憶』 光文社.
- 福嶋教隆 (2012) 「スペイン語の「役割語」: 日本語との対照研究」『CLAVEL』2, pp. 70-86.
- 齋島亘 (2012) 『ロシア文学翻訳者列伝』 東洋書店.
- 鄭惠先 (2005) 「日本語と韓国語の役割語の対照-対訳作品から見る翻訳上の問題を中心に-」『社会言語科学』8 (1), pp. 82-92.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
- (編) (2014) 『<役割語>小辞典』 研究社.
- (2015) 「パネルセッション 日本語とキャラ: 役割語からみた日本語とキャラ」 日本語文法学会第16回大会.
- 羅米良 (2011) 「博士論文 現代日本語副詞の記述枠組みに関する研究」 神戸大学.
- 森田良行 (2006) 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房.
- 中村桃子 (2013) 『翻訳がつくる日本語 ヒロインは「女ことば」を話し続ける』 白澤社
- 中里理子 (2007) 「笑いを描写するオノマトペの変遷-中古から近代にかけて-」『上越教育大学研究紀要』26, pp. 1-14.
- 小野正弘 (2007) 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 小学館.
- 太田眞希子 (2009) 「ウサイン・ボルトの “I” は、なぜ「オレ」と訳されるのか: スポーツ放送の「役割語」」『放送研究と調査』59 (3), pp. 56-73.
- 定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラクタ」『文学』7 (6), pp. 117-129.
- (2011) 『日本語社会のぞきキャラくり』 三省堂.
- (2013) 「第38回「ニタニタ」「にやり」「にったり」について」『日本語社会のぞきキャラくり補遺』 <<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/2013/06/12/三省堂辞書の歩み-日本百科大辞典/?p=3727&more=1>>2016/11/09 参照.
- (2014) 「キャラクタから見た翻訳の問題と解決」『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』113 (440), pp. 1-6.
- (2016) 「内言の役割語-ことばとキャラクタの新たな関わり-」『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』 pp. 14-31.
- 宿利由希子・プーリク, イリーナ・ミロノワ, リュドミラ・ノヴィコワ, オリガ・カリュジノワ, マリーナ・シモノワ, エレーナ・大内将史 (2015) 「ロシア語母語話者の日本語役割語に関する意識調査: アニメ・マンガの役割語に注目して」『日本言語文化研究会論集』11, pp. 19-37.
- 宿利由希子・カリュジノワ, マリーナ・大内将史・プーリク, イリーナ・ミロノワ, リュドミラ・シモノワ, エレーナ・ノヴィコワ, オリガ (2016) 「日本語の性差に関するロシア人日本語学習者の意識調査報告: 翻訳文の自称詞と文末詞に注目して」『日本語とジェンダー』16, pp. 34-41.
- 山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性-日英の対照を通して-」 金水敏 (編) 『役割語研究の地平』 pp. 9-25, くろしお出版.
- Wierzbicka, A., (1998) Russian Emotional Expression, *Ethos*, 26 (4), pp. 456-483.